

## 2)まとめと考察

本報告で提案した「ひろば型ファシリテーター養成講座」という研修プログラムが、研修に参加した受講者にどのような効果をもたらすのかをアセスメントする方法として、受講者が各回の終了時に記述する「ふり返り用紙」の内容を分析、検討した。その結果は前項で延べているように、ひろば型ファシリテーターの意義、子どもや親への理解、聴き手としての姿勢・態度、そして自己理解の大切さ等について、現任の支援者も学生やボランティアもそれぞれの立場に応じて理解を深め、満足度を得ていることが窺えた。全体的に肯定的評価をしているといえる。

もう一つのアセスメントの方法として、これらの成果が研修終了後に実際の場でどのように活かされるのか、終了1ヶ月後に簡単なアンケート調査を郵送で依頼し、回収した。ボランティア・支援者予備軍の資料のみで偏りはあるが、示唆するものがある。

講座に参加してどのような成果があったのか設問に自由記述で回答を求めたものである。

- ① 「最も役に立ったこと」として、ロールプレイング等による子どもや親の気持ちの理解、聴くこと・話すことの体験、さまざまな役職・年齢・立場の人々とのグループ学習の体験をあげている。
- ② 「考え方や行動で変化したこと」として、ひろばの支援者としての自己認識、よく聴こうとする姿勢、ボランティア活動への意欲等が高まったことをあげるものが多い。
- ③ 「講座をもっとよくする方法」として、ロールプレイングやグループワークをもっと増やす、時間配分をもう少し緩やかにする、専門用語の使用はなるべく少なくする等、傾聴のトレーニングを多くする等、をあげている。

④ 「研修のあり方について」は、支援者としての経験が浅いということで意見は少なかったが、参加を通しての仲間づくり、教材に近い資料を求める等があった。その他は、話しやすさ、受講しやすい雰囲気がよかった等の感想が多い。

⑤ 「役に立たなかったこと」について、一人が相談の受け方がまだ身についていないと延べているが、全体的に否定的意見は皆無であった。

⑥ 「この講座を他の人にすすめたいか」について、「いいえ」（回答なし）は1名のみ、ほとんどが前述①および②の理由で「はい」を選択している。

以上、3日間、5コマ12時間半という長時間にわたる連続研修であったが、継続参加者が多く、意欲的に学んでいたとおもわれる。支援者として子どもや親への理解を深めるというだけでなく、まず自分自身を理解することの必要性についての認識も深めたようである。研修後、学習の成果が現場で何らかのかたちで活かされることが肝心であるので、研修後のフォローアップをかねて受講者全員に対する終了1～2ヶ月後のアンケート調査を計画したが、今回、実施期間等の手続き上、ボランティア・支援者予備軍のみへの施行に終わったのは甚だ残念なことである。

本研究では研修プログラムの評価に際して自由記述法による受講者の意見を分析・検討した。その結果によると全体的に肯定的な評価が得られており、ひろば型のファシリテーター養成を目的とした研修プログラムとして有用な実践モデルと考えられる。

アセスメントの方法に、もう少し構造化した方法を導入して客観的な検証をしていくことは今後の課題となる。

## V 支援者養成カリキュラムに

### かかわる研究

#### 1. 子育て支援の場における ヒアリング調査から

沖縄県の保育園併設型の地域子育て支援センターを2ヶ所、神奈川県K市の子育て支援センターを訪問し、ヒアリング調査を行った。

##### 1) 沖縄県の支援センターの実践

###### (1) N市の子育て支援センター

支援センター長の子育て支援に対する基本的理念は、「支援センターは、地域の親子が必要とする支援については、何にでも対応し、あれはだめこれはだめときまりを作らない」ということである。

したがって、支援センターを利用していなかった親子に対しても支援をしている。たとえば、出産後2ヶ月程して母親が心臓を悪くして、母親が赤ちゃんの面倒をみられなくなった家族に対する支援の事例について話を聞いた。父親が2ヶ月の赤ちゃんの面倒をみては、勤めに出ることができないため、その家族の近隣に住む支援センターをかつて利用していた母親達が連携して、赤ちゃんの預かり合いをしてその家族を支えたということである。日中時間を決めて赤ちゃんを預かり合い、夜間も父親の帰宅時間まで預かり、父親の勤務によっては自宅で赤ちゃんを宿泊させるなどして家族支援を行った。複数の人がチームを組み、できる人ができる範囲で、赤ちゃんの世話にあたったということである。

これは真に支援を必要としている人に具体的な支援を届けることを目指している取り組みのひとつといえよう。このような支援を可能とするためには、元利用者たちが我が子の成長後も、OGとして支援センターと関係をもち続けているこ

とが大きい。地域の人たちや関連諸機関が支援センターの存在を知り、支援を必要としている人たちに、支援センターに相談するように薦めるなど、センターが地域に根ざしている。こうしたさまざまな要因が満たされて始めて、草の根の支援が可能となるのであろう。

この支援センターでは、子どもが幼稚園や小学校に通う年齢になっても、元利用者がセンターと関係を持ち続け、年に2回OG会を持っている。OGの母親たちは、ボランティアで毎月発行される「子育て通信N」を折ったり、近所に配布したりしている。以前は、支援者が毎月の便りを折り、支援の時間外で地域に配布していたようである。しかし今では、元利用者や現在利用している母親達が各自の住まいの近所の家のポストに配布してくれているという。「子育て通信」は、8年前から毎月2000部発行し、支援センターの存在を地域の人たちに知ってもらうために、子どものいない家庭にも配布している。子どものいる家族が何か困っているような場合、「支援センターがあるから行ってみると良いよ」と、誰でも薦められるようにとうことであった。

また、支援センターでは母親同士の預け合いもされており、筆者が訪れた際にも行われていた。同じ幼稚園に上の子どもを通わせている母親同士で、ごく自然に預け合いをしていた。訪問した日は雨が降っており、小さい子どもを連れて雨の中を幼稚園に迎えに行くのは大変なので、一人の母親が下の子どもたちをセンターでみて、もう一人の母親が幼稚園に迎えに行くと上の子ども達を連れてセンターに戻ってきた。このようなことは母親同士の信頼関係に基づいて日常的に自主的に行われているという。

###### (2) O市の子育て支援センター

ここでは支援センターを利用する親子が保育園の園庭や園舎内のホールを園児と一緒に使用しており、園児とセンター利用の親子が触れ合う機会が大変多い。

園庭で 4、5 歳の園児がヤカンに水をくんで来ては水を砂にかけ、湿った砂で砂山を作り、トンネルを貫通させていると、1、2 歳の子ども達が興味津々でそばにきてじっと見たり手を出そうとするなど、園児の存在や遊びが子ども達の良きモデルとなっているようであった。

また、このセンターでは、入り口や園庭のあちこちに色とりどりの花が咲き、初めての利用者でも、緊張することなく花に誘われて門から足を踏み入れられるように、大変陽気で明るい雰囲気に含まれている。色とりどりの花々は、利用者の親子の気持ちをなごませてくれている。1 年中花が絶えないよう、季節ごとに植える花の選定にも工夫しているとのこと。

園舎を支援センターの親子と共同で使用している関係で、園児の昼寝の妨げにならないよう、寒い日や雨の日以外は園庭に大きなシートを敷き、昼食をともにし、食後のおしゃべりや子ども同士の遊びがシートの上や園庭でしばらく続くようである。訪問した日も、シートの上でお弁当を広げ、遠足のようにわきあいあいと昼食をともにし、自由なおしゃべりに花を咲かせている光景を見た。このように利用者同士が親しくなり、支援センターが利用者にとって第二の家のような存在になっていくようである。たとえば、夫の転勤でかつて沖縄県に住み、この支援センターを利用していた親子が、外国や他県に転勤になった後も、わざわざ支援センターに近いホテルに連泊して、この支援センターに里帰りする人もいるということであった。

このように、支援センターが利用者にとって心のよりどころとなっているということが、支援のもつ意義の大きさを示すと共に、支援を担う支援者の資質と支援のあり方の重要性を示唆しているといえよう。

以上のような沖縄県での子育て支援の実践および神奈川県 K 市でのヒアリングの内容を含めて、支援の場の実践者が

子育て支援者に求めるものについて以下に述べる。

## 2) 支援者に求められるもの

### (1) さまざまな人や事に関心をもつ

近年、特に若年世代の人たちは、自身と同じような年齢、趣味や嗜好、環境におかれた者同士の交流に偏りがちである。子育て支援の場で支援者として機能するためには、支援の場には、さまざまな価値観や趣味、生活環境や生活スタイル、バックグラウンドをもつ親子が集まっていることを認識し、支援者の価値観や生活スタイルを強いることなく、しかも気になる親子には気配りや共感をし、具体的なアドバイスなども必要に応じてさりげなく行わなければならない。また、支援の場に行きたくても行けない人、支援者に声をかけたいがかけられない人、話したいけれど話せない人たちがおり、そういう人ほど、支援が必要であることを知っていなければならない。

そのために、社会には、自分とは異なる年齢、性別、生活環境、職業、性格、趣味をもつさまざまな人々がいることを知り、関心を持つ必要がある。妊婦、乳幼児を抱える母親、中高生、高齢者などの異年代の人々、また、障害を持つ人、さまざまな職業に携わる人、さまざまな個性や特性の人、国籍の異なる人など、自分とは異なる人たちにも興味と関心を持ち、知ろうとする姿勢が必要である。

また、保育や子育て支援など自分の興味・関心のある分野だけでなく、異なる領域の活動、芸術などにも関心をもつことで、広い視野をもつ人間になってほしいという意見が聞かれた。

支援の場では出会う子どもの保護者や祖父母など、乳幼児をもつ家族の人々は、さまざまな職業、経歴、価値観をもっているわけであるから、その人たちを受けとめ受け入れていくためには、支援者も広い視野をもつことが求められよう。

## (2) コミュニケーション能力とカウンセリングマインド

### ① コミュニケーション能力

初めて支援施設を訪ねる親子にとって、支援施設は未知の場であるので、緊張感や不安でいっぱいであったり、その場や支援者に期待も持っていることだろう。そのような子どもや親を受け入れ、緊張感と不安を和らげるようなことばをかけることが、支援者には要求されよう。さまざまな価値観、感じ方、個性、嗜好、生活習慣をもつ親子をそのまま受けとめ、相手をみながらその人に合うことばをかけられるようなコミュニケーション能力が支援者には必要である。親子が支援の場で時間を過ごした後、「また、ここに来てもいいな」と感じてもらえるような、接し方が求められよう。

支援の場での支援者は子どもよりも親への対応がメインになる。親への対応では、指示したり教えたりの上からもの言う立場から対等な立場へ移行しなくてはならない。一方的に話すのではなく、相手の話をしっかり聴いて、相手を理解しようとするのが大切な役割である。

支援者にとって話しやすいタイプの人とも苦手なタイプの人とも接し、相手の話を聞き、相手に合わせながら、相手を理解していくことが必要である。そして、気配りや細やかなことばかけが特に必要な人かどうか、不安や悩みをかかえていそうな人かどうかを察知して、その人その人の必要に応じたかかわりを選択して、実施していかなければならない。

### ② 傾聴とカウンセリングマインド

保育者として主に子どもの保育に当たっていた者が、支援者として主に親対応を始めたとき、初めて来所した親やまだ気心を知り合っていない親に対してどのように話しかければよいのか、自分の気持ちをどのように表現すれば相手に伝わるのかということで大変悩むという。

親として望ましい姿勢や態度をもつよ

うすすめるよりも、まず、親の話をよく聴くことが、親に心を開いてもらい、支援者との間に信頼関係を築くうえで大切なことである。ここではカウンセリングマインド、すなわち傾聴する姿勢が求められる。たとえば、ある支援者は、子どもとともに夜型の生活をしている母親に対して、「もう少し早く寝かせてほしい」と言いたくなる自分を押さえて、まず、相手の家庭事情などをしっかり聴いて、相手を理解するよう努めていた。

本当にカウンセリングが必要な親子には、支援者がカウンセリングもどきの対応をするよりも専門機関を紹介する方が望ましいと考えられる。しかし、カウンセリングについては、初対面の人に心を開いてもらうためにはどのように話しかけ、どのように相手の話を聴くのか、どのような場合に専門機関を紹介するのかなどについて、ある程度初歩的な知識を持っていることが望ましい。

ひろばなどでは1対1で話すよりも、他の親子がいる中で、子どもたちを遊ばせながら、話を聴いたり話したりすることの方が多く、他の親たちも傍でその話を聞いているという状況で対応しなければならないことも多い。そういう場合の対応の仕方についても、ある程度知識や技術を持っていることが求められよう。

## (3) 家庭的な雰囲気を作り、親の力を引きだし親同士をつなぐ

### ① 家庭的な雰囲気をつくる感性

支援施設を利用する者の中には、核家族であるだけでなく、父母両方の祖父母とも遠方に住んでいてその協力を得られない家族、転勤で慣れ親しんだ土地を離れ、友人・知人もいない不慣れな土地で生活する家族などが少なくない。また近年、他国籍の家族や父親が日本人で母親が外国から嫁した家族が増加してきている。そうした中でより家庭的な雰囲気の支援施設の方が親子がなごみ、心を開き、くつろぐことができるだろう。支援者自

身がそういう雰囲気をかもし出し、環境構成などにも配慮することができる感性があれば望ましい。

たとえば、ある支援施設では、入り口や庭に色とりどりの花を数多く植え、利用者が支援センターに入りやすく、センターでも気持ちが和むようにと、支援者が細やかな気配りをしていた。

#### ②親の力を引き出しつないでいく

支援施設での望ましい支援者のあり方として、支援する側と支援される側という上下の関係、支援者が能動的に働きかけ親子がそれを受けるといった能動受動の関係ではなく、支援者と親子が対等な立場でかかわり合い、親が主体的、能動的に活動することができるように、親を活性化していくことも支援者の役割として求められている。

また、親が支援者に向き支援者に依存するのではなく、利用者同士が良い関係を築き相互に支援し合えるように、利用者同士の関係をつなぐことが求められている。利用者が孤立して、支援施設に来にくくなったりすることなく、心を開いて話せる相手を見出せるように、利用者同士の関係に気を配り、利用者同士を繋ぐことも、支援者に求められている。

また、支援施設のスペースに対して利用者数が多過ぎたり、利用者比べて支援者が少ない場合、利用者の表情を読んだりニーズを把握することが難しくなるので、場所の提供だけに終わらないように、ボランティアの手をうまく活用することも必要とされる。

#### (4) 支援者同士のチームワーク

親の中には、いろいろな課題を抱えた親子がいる。そういう親子が来所した場合、支援者は様子を見て話しかけたり、他の利用者を気にせず話せる場所に誘ってみるなど細やかな気配りが必要である。そして、少し気になる親子が複数来所した場合、支援者間で前もって担当を

決めておくなど、手分けして対応することが必要になる。あるいは、一方の支援者が休みの時には、他方の支援者が適時に対応することになる。

普段から、支援センター閉園後、支援者間でその日の来所者について情報交換し合い、どの親がどんな課題を抱えているか、どの人に特に配慮が必要か、などについて話し合うことが不可欠である。支援者は、他の支援者と率直に話し合えること、同じ気持ちで支援をしていくこと、お互いの対応の仕方を尊重し合うことができ、互いを補い合うことができなければ、支援が必要な人に支援を届けることかできない。

したがって、支援者は、相互に認め合い、支援者間に信頼関係を築くことができるような人間性を持っていることが必要であろう。独りよがりであったり、自己の能力だけを過大評価したり、親たちを自分に引きつけようとしたり、個性が強すぎたりすると、チームワークをとるのが難しくなってしまう。専門性だけでなく、人と一緒にやっつけける調和のとれた人間性が求められよう。

#### (5) 地域資源について熟知し、関連機関との連携ができること

いろいろな課題を抱える親子に具体的な情報提供やアドバイスをするために、親子が生活している地域の資源について知っていること、また、支援者自身がすべてを把握していなくても、どこでその情報が得られるのか、利用者の持つ課題を解決するために、どの機関に紹介すればよいか、などについて認識していることが必要である。福祉・医療・保育・教育など、地域のさまざまな関連機関と連携をとり合い、利用者が必要とするサービスを利用できるようにコーディネートすることが求められよう。

#### (6) 子どもの発達、とくに乳幼児期の発達理解と保育経験

支援センターでは、支援者が主に対応するのは母親ではあるが、子どもの発達について理解し、実際に子どもとかかわることができるしなければならない。

保育者として子どもの保育に携わってきた者は、乳幼児期の子どもの発達に詳しいだけでなく、子どもとの関わりも大変上手である。

保育者としての経験がない場合も、子どもの発達、特に乳幼児期の子どもの発達についてよく認識し、実際子どもとかかわることができるしなければならない。

支援者が子どもと関わる姿は、親にとつてのモデルとなる。子どもから遊びを引き出し、子どもの遊びを発展させるような支援者のかかわりも、具体的でわかりやすいモデルである。

発達の遅れはないが気になる子ども、扱いにくい子ども、発達のゆっくりした子ども、発達障害をもつ子どもなどにも、適切な対応ができることが望ましい。

### 3) 支援者養成のための提言

次に、先述したような資質を備えるための養成、および研修プログラムについて、いくつか提言したい。

#### (1) インタビューから学ぶ

若い世代の人たちは、同世代で自分自身と類似した者と話すことは楽しく容易だが、年代や生活環境や趣味などが異なる人と話すことは苦手だと言われている。また、友だち同士でもお互いに気を遣い合い、深く関わる経験が少なく、広く浅い付き合いで済ませることが少なくないようである。

支援者は、自身とは異なる考え方や価値観、生活環境、年代の人たちを受けとめ、支援する立場にある。

前述の、さまざまな人・事・物に関心を持つ、コミュニケーション能力などをどのようにして培うのかという点について、支援者へのヒアリング調査で得られ

た意見の中から、養成に必要な内容等について述べてみたい。

子育て支援についての机上の学びや知識の習得を中心とする学びだけでは、これらの資質を育てるには不十分である。そこでは体験的な学習プログラムに重点を置く必要がある。

それは日常的に人に関心を持ち、さまざまな種類の人に話しかけることができるようにするための学習である。1つは、相互のインタビューと討論であり、もう1つは面識のない人に対するインタビュー体験と討論である。

#### ① 相互のインタビュー

保育者や子育て支援者を目指す者の授業において、10人程度のグループに分かれ、グループメンバーが2人ずつペアを組み、相互にインタビューし合い、グループ毎に互いに他者を紹介し合い、その活動がどういう意味をもったかを話し合うというものである。

自分自身に関心をもち、他者にも関心をもち、他者に声を掛け、話題を引き出すことを学習し、インタビューされる側とする側双方について考え合うのである。このインタビューにおいては、いくつかのルールがある。それは、i インタビューする側は話さず相手に語らせる、ii 何を質問しても良い、iii 質問されても答えなければ答えなくても良い、iv 質問されていないことでも話しても良い、の4点である。

このような活動においては、自分自身の長所も短所もそのまま受け入れることができ、はじめて他者をもそのまま受け入れられる。若い世代の人たちは、良い子でないと受け入れられない経験をして育っている者が少なくない。したがって、良い面を持つ自分も欠点をもつ自分も、両方共自分自身であり、自身はそのままよいことを認めることができるようになることが重要である。相互のインタビュー体験学習において、その点を学習できることも目指しているのである。

## ②面識のない人へのインタビュー体験と討論

この体験学習では、教室から外に出て、一定時間の間に、面識のない人に話しかけ、3人ほどの人にインタビューする。その後、インタビューした内容について、グループで報告し合い討論するというものである。どういう人に話しかけたか、見知らぬ人に話しかけたときの気持ちなどを報告し合い、初めての人にどうかかわっていくかを体験的に学ぶというものである。

### (2) カウンセリングからの学び

親の力を引き出し、親同士をつなぐ力を育てる力を培うためには、カウンセリングやグループワークの初歩的な知識や技術の学習が必要であろう。

### (3) 環境構成とチームワークの学び

居心地のよい場を作ったり、チームを組むなどの資質を培うためには、他者の緊張感を和らげ、気持ちをなごませる環境構成やことばづかいについて、学ぶ必要がある。環境構成は、子どもが自主的に遊びたくなるような子どものための環境だけではなく、子育てに疲れた母親がほっとできるようなスペースや環境を作ることであり、準備と配慮を要するからである。他者の立場をイメージし、自分の立場から一步踏み出して他者の視点に立って少し考えることができる力とも関係する。そして、チームワークについて学ぶには、グループで活動したり、共同で一つの課題に取りくむような学習を重ねることが有効であろう。

### (4) 地域資源を熟知し連携を学ぶ

まず、福祉、保健、医療、保育、教育等の分野における、行政やシステムの概略とそのつながりについて、保育士養成の専門科目あるいは関連科目の中で、基

礎知識を学習することである。そして、支援施設のさまざまな具体的事例を通して、関連機関との連携のあり方やその実際を具体的に学ぶことができよう。

### (5) 子ども理解のための学び

乳幼児の発達とその保育については、保育士資格および幼稚園教諭免許状の取得を目指す者の場合、資格のための必修科目において学習することになっているので、基礎知識は、それらの科目において学習することができるだろう。さらに、母親から出てくる日常の子育てでの疑問や悩みを的確に理解し、必要ならば適切なアドバイスができるような学習内容を準備しなければならない。そして、3歳未満児に楽しいあそびを提供できるように、遊びについても実践的に学ぶ必要がある。

保育士資格のための学びや支援職についての学びは、机上の学びに重点があるため、できれば、支援職につく前に、保育士として子どもの保育に当たる経験を積んでおくことが望ましいのではないだろうか。

また、幼稚園教諭免許状の取得のための学びだけの場合、3歳未満児の発達と保育に関しては、不十分な点があると考えられる。したがって、3歳未満児の発達、遊び、援助の仕方等について十分学習し、実践的にも学ぶことが求められよう。

## 2. 家族支援職養成カリキュラムの

### 検討

#### 1) ファミリー・リソースセンターのスタッフ その資格と研修

カナダの子ども家庭支援は多くのファミリー・リソースセンターが担っている。多民族が共存し、多くの移民を抱えるカナダでは家族が暮らす上での課題も多様であり、その家族を支援することが社会を維持していくために必須のことであった。ファミリー・リソース事業は子育てをする家族だけでなくあらゆる家族を対象として、必要とされることを提供する努力を行ってきたといえる。

多くのリソースセンターは地域のニーズに応えるべく、民間が立ち上げたボランティアな活動から始まっているが、ファミリー・リソースセンターとして集約され、州政府の補助を受けて運営される現在は、専門的な資格を持つスタッフが支援の仕事についている。

中核となるスタッフは州政府の補助により職員として雇用される身分にある。そのほかにボランティアが随時参加してスタッフの活動をサポートしている。実習する学生も勉強をしながら貴重な人材として現場の役に立っているようだ。支援の場を支える「人」の存在にも厚みを感じられる。

ここではバンクーバーとトロントにおけるファミリー・リソースセンターのスタッフについて、その構成と研修について、現地からの情報をもとに報告する。

##### (1) バンクーバー ファミリー・リソースにおけるスタッフ

バンクーバーのファミリー・リソースに関しての調査と統計はまだ続いて結果は出ていないが毎月のミーティングでは調査の範囲がだんだん大きくなって、04年

度、調査方法を再検討している状況である。

##### ①スタッフの専門性

各々のファミリー・リソースの運営団体 (Board of Directors) によって決められているが以下のように構成されている。

##### i ひろばの子どもの担当者

幼児教育の免許を持っている人 1 名、アシスタントとしてその免許を取る課程にいる人 (パートの学生) 1 名。その地域によって必要な言語を話せる人で子どもと働いた経験のある人 1 名。

##### ii ひろばの親の担当者

カウンセリングまたはソーシャルワークの学位を持っている人 1 名

##### iii 非営利団体の事務担当者

事務の仕事と会計の経験のある人 1 名。  
以上が典型的なファミリー・リソースのスタッフの現状である。

##### ②スタッフの研修

i と ii つまりひろばで働く人は年に 3 回くらいの研修がある。5 月には一番大きな B.C.州の保育者の集まる ECEBC Conference が 3 日間続く。それにはほとんどのファミリー・リソースのスタッフが参加する。その他マザー・グースのような研修で Story Telling Workshop (お話や読み聞かせの研修) や Circle Time Workshop (歌やリズム遊びなどの研修) などがいろいろな団体から提供されている。参加者には Board の許可によってファミリー・リソースから費用が支給される。

ii の親担当の人はその他に Single Mothers Support(母子家庭支援)や、Understanding Native People (先住民理解) などの研修に、年 1~2 回参加することが出来る。

iii で働く人は、非営利団体の資金の集め方などの講座に参加し、コンピュータの使い方などの講座に参加することが出来る。スタッフの研修の他に Board-Volunteer(委員ボランティア)であるが、この人たちには毎年 5 千ドルほどの費用



が州政府から出ており、ミーティングのやり方、ストレス解消法などの研修を受けている。(以上、BC州大庭みどり氏の情報提供による)

## (2) トロント ファミリー・リソースセンターにおけるスタッフ

トロントのダウンタウンにある「ペアレント・リソース」は、中国系の人口の多い地域に位置し、利用者も中国系の親子が多い。雇用スタッフは5人、ライオン大学のファミリーサポートを卒業し家族支援職の資格を持つもの2名、幼児教育資格者2名、ソーシャルワーク資格者1名で構成される。

ファミリー・リソースセンターで働くには、家族支援もしくは幼児教育の資格を持つことが必要である。それ以外では、大学または専門学校からの近接領域、たとえば心理学や福祉の修了書が必要である。

その他、地域に住み、長く利用者であった子育て経験者がパートタイマーとして雇用されることもある。勤務を始めた後に夜間や通信教育を受け、それなりの教育を身につけることも多いという。他の関係機関が開く研修やプロを育てるトレーニングを受けて専門知識を身につけることも少なくない。

リソースセンターにとって、必要な知識や地域情報を持ち合わせた地元のスタッフを雇用することはセンターの強みや長所になり、また地域の経済にも貢献することになるため、双方にとってメリットになり役に立っている。

その他、ボランティアとして手伝いに通っている人も多い。学生の実習の場にもなっていて現場での経験をもとに学ぶ学生の姿も多い。学生の働きもセンターの活動にとって貴重な資源となっている。(以上、原田聖子氏の情報提供による)

## (3) 日本における家族支援職の必要性

以上のように、カナダのドロップイン、ひろばで働くスタッフは職員として雇用され、子ども担当には幼児教育、大人つまり親担当にはファミリーサポートやカウンセリング、ソーシャルワークなど、それぞれに対応する専門的資格を持っている。他民族が共存する移民の国ならでの問題や家族が抱える多様な問題に対応するために、専門性を持ったスタッフの力が必要であったと推測される。

日本でも、社会状況や家族が抱える問題も多様となり、深刻さを増していることが昨今うかがえる。子育て支援が少子化対策として始まり、子どもを産み育てやすい社会づくりをめざしてきて、市民活動を含めさまざまな取り組みが始まりそれなりの貢献をするようになってきた。

しかし虐待、DV、離婚の増加等家族をめぐる状況は好転したとは言えない状況である。「子育て」を支援するだけでは間に合わない、深刻な状況に陥った家族が増加する中で、まずは家族そのものが抱える問題を解決することで、親が子育てしやすい状況になるよう支援する必要性が生じてきているように思う。そのためには支援者がそれに耐えうる力量を持つ必要があるだろう。

一方、日本の子育て支援は始まって日が浅く、はじめは保育所に併設された地域子育て支援センターで、保育士が主にその任を担ってきた。最近はそのに加えて民間団体による支援活動が活発となり、国によるつどいの広場事業もNPO等の市民が担うことが多くなっている。それを担うスタッフについての規定はなく資格を問われることのない中で、ボランティア的な就労で任に付くスタッフがほとんどを占めているのが現状である。

近年日本の家族や子どもたちの様相も複雑となり、課題も多く抱える家族が増加している。子育て支援がなすべきことが何かということも明確に議論されることなく、「支援」という活動が始まり、その内容も少しずつ進化し変容して

きてはいる。しかし虐待や少年犯罪など親子の問題が深刻になるにつれ、支援のあり方やその内容も問われるようになってきたのではないか。支援を担当する支援者とは、支援者に求められることは何か、持つべき専門性は何かなどはいまだ不明確で、早急に考えられるべき課題であると考ええる。

以上の課題意識から、ライアソン大学が提供しているカリキュラムの一部を紹介しながら、支援者に求められる資質や課題について検討してみたい。この家族支援職の養成コースは、家族とその課題に正面から取り組み、支援職としての専門性を身につける課程になっている。その内容には、日本が示唆を与えられる多くを含んでいると考えている。

## 2)ライアソン大学の支援職養成課程

ライアソン大学生涯教育学部では、1996年にオンタリオ州およびファミリー・リソースプログラム協会公認の支援職養成課程を発足させた。ファミリー・ライフエデュケーションおよびファミリー・リソースプログラムの2専攻課程を擁するファミリー・サポート課程である。ここでは子ども家庭支援により近い、ファミリー・リソースプログラム専門講座について検討を試みる。

まずこのファミリー・サポート課程を紹介するリーフレットのファミリー・リソースプログラム専攻部分を読むと、「ファミリー・リソースプログラムは、コミュニティに依って、そこで暮らす家族のウェルビーイングを増進し子どもを保育する保育者をサポートする一連の予防的プログラムを提供する。おもちゃや備品の交換、スペシャルニーズをもつ親子グループの支援、食料、識字、就職支援とコミュニティの経済発展などへの実質的な支援を提供する」と書かれている。全ての家族に開かれた総合支援窓口ともいえるプログラムである。これを担当するス

タッフにはかなりの力量が必要であると考えられる。

養成カリキュラムを見ると、合計8科目を履修することになっているが、まず必修科目が「家族の課題Ⅰ」および「実習」の2科目である。選択科目として以下の6科目、「グループダイナミックスと対人コミュニケーション」「家族の課題Ⅱ」「ファミリー・リソース・支援事業の理論と実践」「プログラムの企画」「農村・過疎地域へのプログラム提供」「地域の経済発展」から3科目を選ぶことになっている。残りの3科目は、指定された別コースの関連科目から選択するか、上記の残りの科目を取ることでもある。

以下にこのコースに設置された8科目の概要を述べ、必修2科目および選択2科目については少しくわしく紹介したい。

## 3)履修8科目の概要

### (1) 選択4科目

ここでは、まず4つの選択科目の概要を簡単に紹介する。

#### ①「家族の課題Ⅱ」

この科目では、家族の生涯の各段階にかかわる特定のグループのリーダーとしての技能を習得する。担当教員の指導のもと、家族の生涯の一つの段階のあるテーマを選び、模擬グループを作り、そのグループのためにセッションを企画・指導することが課せられる。グループセッションはたとえば育児、独身生活、同棲、結婚、離婚、別居、ひとり親育児、再婚、再婚家族など、さまざまなテーマを設定する。

家族のある段階のあるテーマをとりあげて、家族にかかわる経験に基づいた計画を立て、模擬ではあるが、そのグループに対して責任を負うことが求められる。理論や文献から得る知識だけではない、経験的学習によるスキルを身につけることができる、実践力を育てる科目であることが分かる。

②「ファミリー・リソース・支援事業の理論と実際」

この科目は、家族に提供する資源や支援事業の原理とアプローチへの導入、基礎に当たる内容をもつ。地域や他の公共団体・政府の政策という文脈の中で、生態学的視点で家族や養育者（保育者）のニーズを検討する。歴史的・比較論的アプローチによって、ファミリー・リソース事業における現在の実践ならびに発展について検討するものである。履修する場合は、地域のファミリー・リソースセンター等の支援現場に実際にかかわっている必要がある。

家族は、次世代の人材、労働者そして市民を育てる役割を担っている。家族が子どもたちを未来に向けてどのように育てていくかは、全ての人にとっての未来に影響を与える、といった考えのもと、親の役割、親のあり方が社会の中の重要な課題として話し合わせ、家族自身の努力に社会がどう貢献していけるかは、政治の課題でもあるとする。

この授業では、家族を社会や政策といった文脈の中で理解し、助けを必要とする全ての家族を対象にした支援、ファミリー・リソース事業とは何か、現場ではどのような事業が展開されているのか、について多くの文献を読み、実在するプログラムの例を研究しながら学んでいく。

1998年のテキストによれば、以下のような構成になっている。

I	カナダを背景としたファミリー・リソース事業の概念化
1	ファミリー・リソース事業の評価 その源流と現状
2	ファミリー・リソース事業の主たる特徴と性格 多面的・多様な特性
3	ファミリー・リソース事業の主たる特徴と性格 一般的・共通の特性
4	ファミリー・リソース事業実践のためのガイドライン 実践の原理
5	ファミリー・リソース事業と保育の

	関係 家族支援としての保育
6	ファミリー・リソース事業への政府政策の影響 経済・労働・法律等
II	カナダのファミリー・リソース事業における理論
1	ファミリー・リソース事業における社会的支援 支援ネットワーク
2	ファミリー・リソース事業における成人教育とエンパワーメント
3	ファミリー・リソース事業と地域の発展 地域力による発展
III	ファミリー・リソースプログラムにおける理論と実践 その統合

以上のような内容から、家族支援プログラムが、家族が機能して健全な子どもを育てていけるよう、親や養育者に力をつける、エンパワーしていくことに主眼を置く予防型の支援であることが理解できる。また、プログラムを政治、社会、地域の中に位置づけ、その関連を学んだ上で形成していくものとし、最後には理論と実践の統合についてまでを課題としている。テキストに添って家族支援の理論を学び、現場での経験をもとにその実践について学ぶ、両面から学んでいく授業である。

③「農村・過疎地域へのプログラム提供」

カナダは土地が広く、郊外に出ると広大な土地に人家が点在する、家族が孤立しやすい環境である。こうした家族に必要な支援・サービスをどのように届けるか、都会とは違った取り組みが必要となる。支援者として身につけるべきスキルの一つとして組み込まれた科目である。

この科目では過疎地における人口構造、政治の構造、社会的力動の特徴について検討し、地域をベースにした事業の特徴が持つ意味について探求する。先住民社会についての理解を深めることもできる。履修する学生は農村での事業にかかわっているかその経験があることが必要である。

#### ④「地域の経済発展」

この科目は地域の経済発展をテーマとしたもので、学生が家族支援プログラムを考えるにあたって、地域経済に目を向けることが重視されていることが分かる。

この科目では、家族支援のためにデザインされた地域経済の発展の例について学ぶ。家族支援という文脈での地域経済発展の価値、戦略、原理について理解するために、学際的な実践の見地から複数の理論を検討して学ぶものである。

#### (2) 必修2科目

##### ①「家族の課題Ⅰ」

この科目は学際的な内容で、社会という文脈の中での個人と家族の各発達段階について関連の理論、文献、課題を検討する。カナダの家族が抱えている課題・問題を徹底して多面的に理解をすることを目標とする、かなり重いテーマを含んだ内容になっている。

ねらいとして、個人・家族の発達および家族が置かれている社会・政治的環境との関連を理解し、かつその方法を身につけること、家族の課題・問題を理解する上で、学生自身が視点を定め、内省すること、ファミリー・リソース事業における学生自身の役割において、学生自身の見方・考え方がどう影響するかを特定できることなどを求めている。

これらについては多くの論文を読み、理論を学ぶ必要がある。その上で個人の体験と理論を比較する過程を重視、家族支援の現場で個人的・感情的反応をする前に、自身のものの見方と価値観などを熟知しておく必要があることが強調されている。こうしたテーマについてほぼ毎週のレポートがあり、内省した内容を書くことが求められる。

2004年のテキストによれば、以下の内容になっている。

1	コースの概要
2	社会の中の家族 文脈としての地域社会 環境からの作用
3	家族の発達 新しい視点 エンパワメント
4	家族のメンバー間の関係や社会の中での「パワー」
5	文化 多様性そして偏見
6	ジェンダー 女性の役割
7	ジェンダー 男性の役割
8	結婚と離婚
9	妊娠、出産、育児
10	仕事と家庭
11	貧困
12	家庭内暴力と虐待
13	介護者としての家族
14	回復力と適応力

以上からは、他民族が暮らすカナダが抱える家族の多様な課題が読み取れる。しかし、量的な差はあってもどの国にも共通する課題でもあって、それらに正面から取り組もうとする姿勢と実践があって、組みこまれた内容であることが推察される。

最後のまとめには、学んできた学生に向けて次のように書かれている。

14週間、あなたは現代の家族の脆さと能力の両面を検討することを通じて、家族がかかえる現代的課題を徹底的に熟考してきた。その過程で、あなたは自省することをうながされ、そして、多くの枠組みすなわち「眼鏡(時には色眼鏡)」を学び適用することによって、家族がかかえる問題を考えてきた。このコースでは、あなたの自省的分析が、実社会のファミリーサポート事業において、家族の課題と向き合う際の任務遂行能力を強化することにつながる、と仮定している。

さまざまな見方や考え方を学ぶことにより、あなたは今よりもっと家族の課題を深く分析することができるようになり、願わくば解決策を講じることができ

るようになるだろう。また、社会的政治的文脈、すなわち、より広範な地域社会と環境が、個人や家庭、システムに与える強烈なインパクトを、あなたが明確に理解するようになることを期待している。

この理解とより広い視野をもたらす一つのアプローチが、第1講で学んだ「生態学的アプローチ」である。ここでいう生態とは、生きているものとそれらを取りまく環境の間の関係のことである(Last, 1988)。人類は、家族の環境を形成する意思決定をする。そして、その環境は進化し、多様化するものである。家族の環境は、個人、家族、組織、社会で構成される。そして、社会は、法と政治の構造が最も権力的であるという人間の構造により構成されている。このコースでは、この構造が、家族のウェルネスをサポートし、家族のかかえる課題に取り組む上で最も影響力のあるものと考えた。換言すると、もしある者が家族のウェルビーイングに強力なインパクトを与えたいのであれば、その者は、家族の環境全体に影響を与える方法を見つけなければならない、ということである。

カナダ、そして世界における最も急性かつ根源的な家族の問題は、貧困である。相対的貧困すなわち広がりつつある貧富の格差と絶対的貧困の両方が、個人や家族が直面する主要な困難の原因となっている。この貧困に取り組むためには、特に連邦レベルで政治ならびに法律の改革が必要である。逆に言うと、こうした改革は家族のウェルビーイングに著しいインパクトを与えるであろう。教育、リソース、(関連機関・専門機関などへの)紹介、そしてケアは、家族支援環境の必須事項である。いかなる方法、いかなるレベルであれ、家族支援事業におけるあなた自身の健闘を祈りたい。

以上の要約からも読み取れるように、このコースでは家族というものについて、

家族そのものの歴史的段階を理解し、内包するさまざまな課題を理解するだけではなく、家族と周りの社会との関係、それら全てにインパクトを与える政治、法律までを視野において理解することを求めている。支援はこうした深く広い観点から家族とその置かれた環境を考慮したうえで、家族の環境全体に影響するものであることを期待する。カナダの家族支援が通り一遍のものでないことが理解できる。

## ②「実習 (プロジェクト・プラクティカム)」

このコースにおける最後の必修科目、現場での実習については、現在この課程を履修中の原田氏の報告をもとに、その進め方を述べる。

### i 履修の条件

このコースでは生徒の自主性が問われる。このクラスは、通信教育の形で行われ、インストラクターとはほぼ2週間に1回のペースでミーティングがあつて指導を受ける。学生は、コースのほとんどをガイドブックにしたがって自主的に実行していく。6週間と時間が限られているため、時間を守りながらスケジュールに沿ってプロジェクトを実施していくことが重要である。学生はファミリー・リソースセンターで働いているか、ボランティアをするなど何らかの形で現場とつながりがあることが要求される。

コースの中で学生は、リソースセンターで実際に経験したことや自分でファミリー・リソースプログラムなどについて調べたことをもとに、見出した問題やまだ改善される余地のある点を挙げ、それにつながるプロジェクト考案、提案、そして実施していく。学習するというよりは、経験するコースといえる。

### ii 履修の始まり

他の7つのファミリー・サポートの科目を終えたら、プラクティカムの担当教員にこのコースを取りたい旨を伝える。許可が出れば取ることができる。そのときに、学生が実際に存在している現場とつながりがあるかどうか、

どこでプロジェクトを実施するかどうかはほぼ決まっていることが必要である。

はじめの週に担当教員とのミーティングがあり、ここでは、コースの概要、学生が要求されることなどについて伝えられ、またプロジェクトのアイデアとして生徒が何を思案しているか問われる。その2週間ほどあとに、2回目のミーティングがあり、このとき学生のアイデアの軌道修正などが行われる。その後は、提案書を作成し、それを提出する際にもう1回教員とのミーティングがある。提案書に許可が出るまでは、プロジェクトの次のステップに進むことはできない。許可ができれば、そこから6週間のスケジュールでプロジェクトを実施することとなる。

### iii テーマの設定

プロジェクトのテーマは、原田氏の場合、違う言語を話す人の中でのコミュニケーションについて、とした。トロントにはいろいろな国から来た沢山の移民がいて、その中でも多くの方は、英語が話せない。氏がボランティアをする組織のプログラムにも、たとえば英語の話せない中国系の家族が沢山訪れる。お互いに共通の言語を話さない場合、スタッフにはコミュニケーションのテクニックが問われることになる。それぞれの間に、時間をかけて築かれた信頼が存在すれば、言葉が通じなくても会話は難しいことではない。

そうした中で氏の考えたプログラムの目的は、言語的、また非言語的なコミュニケーションの方法とサービスを調査、研究し、改善していくことであつたりする。本などでよく言われることであるが、同じ言語を話していても誤解なしにきちんとした会話をすることは難しいことである。全体的に原田氏のプロジェクトは5つのパートからなり、それぞれ「提案書提出」、「インタビュー」、「リサーチ」、「ワークショップ」、最後に「レポート提出」となるという。それぞれの過程はプロジェクトを完成させるために大切な部分となっている。

### iv 提案書の作成

よい「提案書」は、最後によいレポートを作成するために必要であり、そこでは6週間の

なかで、何がどう行われるか、また何を使い、いつ実施するかなどを詳しく述べるものである。提案書を話し合うミーティングでは、教員が提案書の書き方から、内容の細かいところまで良い悪いを指摘してくれる。直すところが多い場合には、またやり直しになる。提案書がプロジェクトの土台になるわけであるから、それがしっかりしていなければ、良いプロジェクトもできないということである。スケジュールについてだけではなく、対象にしている地域、住民などの背景、その人たちのニーズなどもここで述べるため、あまりその地域やコミュニティについて詳しくない場合は、少しのリサーチが必要になることがある。

### v インタビュー

その後、「インタビュー」のパートでは、トロント市内にある他の団体組織を訪れ、そこで働いているスタッフに、日常経験するコミュニケーションの難しさや、日ごろ気をつけるようにしていること、共通の言語を話さない人との会話改善のために存在するサービスについてなどについて教えてもらったという。指導教員は、他の団体訪問などを通して、いろいろ違う人と出会い、沢山のプログラムを見学して回ることを奨励する。一つ一つのプログラムやファミリー・リソース団体は、それぞれ個性があり違って、そこから学べることも違うからである。

### vi リサーチとワークショップ

「リサーチ」のパートでは実際に図書館やそのほかメディアなどを利用して、実際に存在するコミュニケーションについて調べ、インタビューで得た結果とまじえて、いまのファミリー・サポートサービスを改善するために役立てている。

「ワークショップ」のパートでは原田氏がプロジェクトを実践するセンターのスタッフに、調べて学んだことを知ってもらおうと、ワークショップという形で結果発表を行った。そのときに、新しく考え出したサービスなどがあれば、取り入れてもらえるかどうか検討してもらうことも考えているという。

## vii まとめ・レポート

最後の「レポート」は、それまでやってきたことの総まとめである。よい提案書を書くことができているならば、レポートはそれほど難しくはないといえる。

以上は、原田氏のプロジェクトの例であるが、学生一人一人違ったプロジェクトを提案、実施するため、それぞれステップも違ってくることになる。他に同じコースを取った人のプロジェクトでは、ある文化的背景からきた移民の人を対象に、カナダの社会サービスやサポートについて情報提供をしたりしていた。氏のプロジェクトでは、ワークショップはスタッフに対して行ったが、その人の場合は、地域の住民に対して行っていたという。

## viii 大切なこと

プロジェクトを考え、実施する上で一番大切だといわれたことは、あまり理想的にならないことである。6週間しかない時間の中で、その地域、コミュニティのニーズに対応したプロジェクトを生み出すことが重要である。そのためには、自分がその地域、住民などを良く知っておくことが大切となる。また、ファミリー・リソースセンターがその地域住民にどう貢献しているかもプロジェクトに影響してくることなので、プロジェクト成功のためにそのあたりをしっかりと把握しておくことが大切であるという。

## ix パーソナルゴールを設定する

このコースでは、プロジェクトを実際に実施する以外に、もうひとつの目的がある。このコースでは、プロジェクト思案の段階で、自分を見つめ、自分がプロとしてこれからこの分野で活躍するにあたって苦手なところや自分の改善したいところを見極め、3～4つのパーソナルゴールを設定することである。このコースで学ぶことで、実際に社会に存在する団体やプロのスタッフたちと触れあう機会があるため、今までにそのチャンスがなかった学生たちにとっては、実際の社会に触れ、自分を見直すよい機会となるといえよう。

自分で設定したパーソナルゴールは、提

案書の中で述べておく。最後のレポートの中に、どれほど自分がそれを達成し、満足しているかも述べる。パーソナルゴールは、人によってそれぞれである。プロジェクトを通してパソコン使いにもっと慣れたいという人もいれば、時間の使い方が上手になりたいという人もいる。原田氏の場合は、英語でも人前であまり緊張せずに話すことができるようになること、人の話を結論を急がずじっくり聞けるようになることなどを設定したという。些細なことであるが、実際に自分を見つめなおすことで欠点が見え、プロジェクトを通してその改善には努力が必要なことを学ぶことになったのだという。

以上のように自分にとっての課題を設定し、プロジェクトを進めながら自己改革を進めることが求められる過程があることで、支援者としての資質は確実に高まることが推測される。

## (3) その他の選択 2 科目

### ① 「グループダイナミクスと対人コミュニケーション」

この科目は、学生自身のコミュニケーションがもたらす効果について認識するのと同じく、学生自身の自己および他者についての認識を深めることに主眼がおかれている。人の話を聴きそれに応えるスキル、フィードバックを受けそれに応えること、自我についての概念を強化し、信頼関係を構築すること、自己開示の適切なレベル、コミュニケーションにおける文化の影響など、広い分野のトピックについて経験的学習法を用いて取り扱う。学生はグループのプロセスを観察・分析し、文献を読み課題をこなすことを通してグループ過程の理論を理解し、グループでのリーダーシップやコ・ファシリテーションのスキルを身につけていくことが期待される。

この科目についても原田氏の履修経験に基づいて報告する。

### i コースの特徴

このコースは6日間の短期コースで、この短い間にインターパーソナル・コミュニケ

ーションとグループダイナミクスについて学ぶ。毎日 4 つのトピックが取り上げられ、(午前2つ、午後2つ)途中プレゼンテーションの発表会が 2 日にわたって行われる。課題は、発表とその過程についてのジャーナル1つ、最終レポートを要するプレゼンテーションとジャーナル3つである。このコースでは、実際の宿題よりは、クラスの中でどれだけコミュニケーションに参加し、グループ学習に貢献したかが重要となる。

クラスの中では、机は一切使われず、学生は円形に並べられた椅子に座り、そこでノートを取ったり発表したりする。人数の多いグループの中では、こうして座ることがコミュニケーションを促すひとつの方法となる。北アメリカには多い学習スタイルといえる。また、Experiential Learning(経験的学習)といって、クラスの中で学生が講義を受動的に聞くだけでなく、積極的に自分の思想や意見を述べ、他の学生と比べたりまた反対意見を述べたりして学んでいくのも北アメリカに特有な学習の仕方だといえる。

このクラスは他学科の必要科目にもなっているためファミリーサポートの学生だけでなく、他学科の学生も大勢履修する。

#### ii 1 日目 家族支援プログラム

第1日目は、それぞれ生徒の自己紹介、またクラスの紹介などが主となる。自己紹介をする際、硬くなりすぎないように自分の趣味を述べたり、授業やそのトピックに関係ないことも互いに述べる。午後は家庭生活技能にかかわる教育と、ファミリー・サポートプログラムについてその歴史、哲学を学ぶ。家庭生活技能教育の一般的な目的は家庭生活をよりよいものにし、家庭に焦点をおいた教育によってそれぞれの家族の社会的な問題を減らすことにある。

#### iii 2 日目 人の学習スタイルと小グループの発展

第2日目のテーマは「人の学習スタイル」と、「小さめのグループ発展の論理とその段階」である。「人の学習スタイル」にはいろいろな種類があるが、スタイルの中に

は主に 4 つのカテゴリーがあり、それは「経験タイプ」、「観察とその反映タイプ」、「抽象概念と論理の一般化タイプ」、「新しい状況において理論の暗示することの実験タイプ」があり、人によってそれぞれの要素の傾向に強弱があるという。これを知ることが必要な理由は、プレゼンテーションや、講義など、「レッスン」を計画する際に学習スタイルの要素すべてを取り入れることが大切だからである。

「グループ発展の論理」によると、グループには 4 つのステージ、1.グループの形成、2.混乱、3.統一、4.実行があり、それぞれのステージでグループメンバーの行動などが変わってくるとされる。それがどのように発展するかには、リーダーのあり方が大きな役割を果たす。また、グループの目的や成り立ちもその発展に影響を及ぼす。

#### iii 第3日 リーダーシップとウォームアップ

第3日目のテーマは、「リーダーシップスタイル」、「ウォームアップ(アイスブレイカー)のデザインと用途」である。リーダーシップスタイルの中には支配的、調和的、無秩序、民主的などがある。状況によってこれらを使い分けるのが賢いリーダーシップの取り方である。

毎日朝一番のアクティビティは、アイスブレイカーといって、クラスの雰囲気や和らげるゲームなどを行う。ワークショップや、ビジネスの会議など互いに知り合っていないグループの中で、議論や学習を目的にして集まる時には、このアクティビティが大変重要となる。アクティビティの種類は沢山あるが、たとえば自分の好きなものを紙に書いて名札のように自分の胸にはり、グループの中を歩き回ってそれについて人と会話することがある。共通の趣味を持っている人がいたり、同じ色が好きな人がいたり、会話を始め、発展させる練習になる。とくに初めて会った人が苦手な人にはよい練習になる活動である。

#### iv ライフスキル・モデル

第4日目は「ライフスキル・モデル」につ



いて、どのようなワークショップを用意するかなどについて学ぶ。その後はプレゼンテーションの準備時間に当てられ、4人グループでたとえば怒りとその抑え方、あるいは調停プロセスなどをトピックとして準備を行う。それぞれウォームアップや、導入エクササイズなども含めて1時間ほどのレッスンを用意する。

#### v グループ発表

第5日、第6日目はそれぞれのグループ発表を行う。グループでたとえば調停のプロセスや、怒りの抑え方などについて発表する。アイスブレイカーのアクティビティやその後の導入エクササイズなど順を追って1時間ほどの発表をする。他の学生が反応すればするほど、発表する側とそれを聞く側のコミュニケーションが多いほどプレゼンテーションは良い評価を得るといえる。

最後のトピックは、「レッスンのしめくり」についてである。ユニークな点は、しめくりの際に、人々にそれぞれが感じていることを発表する機会を作ってあげることが必要だということである。

このコースでは、コミュニケーションスキルを学ぶことになるが、グループを対象にグループダイナミクスを用いながら、経験的学習の一環として、対人態度における大切なことを学ぶ科目であるといえる。

## ②「プログラムの企画」

この科目は、家族支援を行うための企画力を育成することを目的とする。ファミリー・リソース支援事業に対するニーズを見極めるために必要な知識とスキルを学ぶことを主眼とし、ニーズに応える企画、リソースの調整、プログラムの導入と効果の評価まで、一連の実践力をつけようとするものである。

コースガイドによれば、到達目標に、

- i プログラムの手法となっている参加型アプローチの利点と限界への理解
- ii 支援を必要とする人々のニーズのアセスメントへの明確な理解
- iii 地域社会や支援組織の強みや弱み、キ

ャパシティをはかる方法の理解

- iv 支援・介入にかかわる多くの選択肢を知り、必要な選択肢を判断する力を持つ
- v プログラムの最終目標 (goal) と目的 (objective)を決められること
- vi その他、プログラムの論理モデルを用いて素案を作り、運用計画が立てられること、等が挙げられている。

実際にプログラムを作成し実践を行うには、以下の過程があるとする。

- i ニーズアセスメント： 何らかの対策が必要な地域の課題について理解する
- ii キャパシティ・アセスメント： 地域にある資源、地域でできることを発見していく
- iii プログラム・プランニング： 地域社会に入っていく手法、段階、手順を決めていく
- iv プログラム評価： プログラムの過程や結果を理解するための方法を決めて実践する、などが挙げられている。

家族支援の実際のプログラムでは、上からの指導型のアプローチではなく、実行委員会に当事者を入れて、意思決定にあたって平等であることを保障する。また、ニュースレターや公開イベントを催して、地域の一般からの反響や今後についての提案を受けられるようにする。地域社会の人々に支持されたプログラムを実践するという姿勢を持つことなどが提案されている。専門家や指導者が一方的に与える形を取らずに、地域の当事者を実践者側に巻き込む、つまり当事者と一緒に、平等に意思決定に参加させて進めるという参加型であることが、プログラムの効果をもたらすと指摘されている。

#### i ニーズアセスメント

ニーズのアセスメントは、地域社会が抱える課題をよりよく理解するために行う。行うことでなぜ、どのように家庭が支援を必要としているかを理解すること

ができる。課題を正しく理解するために、さまざまな考え、立場の人の参加を得て行うことが望ましい。その結果は建設的で、尊敬の念に満ちた方法で説明されるべきである。

#### ii 地域社会と組織のキャパシティのアセスメント

相手のニーズを理解すると同じくらい、自分たちのキャパシティの理解に努めることが必要である。地域、個人、組織にできることは何か、役に立つ資源・皆が持っているスキルは何か、使える人は等を理解することは重要である。

これまでできたこと、楽しめることは何か。逆にできないこと、地域の人たちの反応などを視野に入れておく。これらを抽象的でなく具体的に考えていくことが大切である。

#### iii 支援計画を立てる

ファミリー・リソース事業は本来予防的・啓蒙的なものである。起こりそうな問題を予想してそれを予防していくことを主眼とするので、効果があったのか、その結果を測ることは難しいことになる。

そのプログラムをどう提供するかであるが、一般的には会場などを準備してそこで対象とする人々に提供することになる。家庭に訪問したり、近くまで出張するやり方もある。

最終目標をどこに置くか、そのためにどのくらいの実践を行うのか、時間や頻度をどの程度にするのかなどは、参加者の反応や資金との兼ね合いにもよるだろう。どのレベルの人たちを対象にするかによっても異なる。他のプログラムに乗せて行うこともあり、資金提供者の要請によって内容が限定される場合もある。

#### iv 自分のプログラム理論を作る

あるプログラムやイベントを行うにしても、なぜそれをやるのかについて、自分なりの理論を持っていなければならない。それは人に説明するにしても助成金

を申請するにしても、コミュニケーションの手段としても必要である。

\*まずは趣旨説明、何を目標としているのか、なぜそれが良いと思うのか説明ができること。

\*プログラムの目的はなにか、目的とする結果と目的とする方法、そして実際にどのように行うのか、が具体的に考えられていること。

\*プログラムの論理モデルを作成する。プログラムの構成や活動、結果の間の論理的関係が明確で整合性があること。プログラムがこの状況で役立つ、効果的であるという証拠、目標達成まで維持できる、対象グループの文化に合っている、などが説明できる根拠を持っていることが必要である。

#### V プログラムの運用プランを作る

誰が誰と、いつ何をするのか、の具体的な詳細計画を作る。計画に従って実践する。

#### VI 評価プラン

評価は、プログラムの価値を資金提供者に示し、次の援助を得るためにも必要である。また地域社会にも示して社会的認識を得るためでもある。特定された問題やプログラムの限界を知り、どのように取り組むのが一番なのかを決めるためにも、評価の意味がある。

評価の焦点として、何を評価しているのか、なぜ評価するのか、結果に対して何をするのか、を明確にしておき、評価プランに組み込んでおくことが大事なことである。

評価の内容としては、プログラムの導入が意図通りにできたか、過程はどうだったか、参加者の満足度は、費用対効果は、などがあげられている。

以上、ライアソン大学における「家族支援職養成コース」のカリキュラム8科目の概要を紹介した。

コースの説明には「急速に変貌する社

会の中で、どのようにすれば家族をサポートできるか、そのスキルと知識を提供する」と書かれている。さまざまな状況に置かれている家族にかかわる人々を対象に開かれたコースであるが、支援の現場にかかわりながら、多くの文献を読み、理論と現場の実態との関連を検討、実践プランを立てて現場で検証し、仲間との演習で学びあうなど、多角的な学習を重ねていることが分かる。

### 3. 日本における支援職養成と

#### カリキュラムへの提言

##### 1)ライアソンのカリキュラムから示唆されるもの

前節では、ライアソン大学の家族支援職養成カリキュラムについて得られた資料から概要を述べた。この課程での学習が、現場の実践と直結したもので、講義型よりは参加型授業、グループ演習、そのなかでの経験的学習など、学習法そのものが日本の大学における通常の学習スタイルとは異なっている。そのためこれらを日本の大学にそのまま取り入れることは難しいことが予想される。

日本の大学が取り入れられるものがあるのか、それはどのようなものであろうか。ライアソンの8科目の概要から得た示唆を検討し、日本における支援職の養成およびそのカリキュラムについて提言を試みたい。

子育て支援とは、子どもが健やかに育つために、子育てをする親や家族を支援することであると考えられる。子どもが育つ場、背景となる家族が健全に機能していることが大切なこととなる。しかし現代社会の中で、家族が子どもにとって必ずしも望ましい環境となりえない条件が多いと言わざるを得ない。子育てを支えてくれる地域社会のない中で家族だけ、親だけの努力では子どもの育ちを守りきれない状況になっている。こうした中で、子育て支援においても家族支援はますます必要性を増していくことが予想される。支援職としてまずは家族のことを学ぶことが必要ではないかと考える。

この支援者として学ぶ課程をどこにおくかによるが、若くまだ自分の家族を持たない大学生の段階ではまず家族に関心を持つのか、家族を学ぶことは難しいのではないかということ、ライアソンでも議論されたと聞いている。しかし保育者養成に関連して設置された背景には、

早くから家族を学ぶことによって、保育者にありがちな子どもだけを視野に置くようになるのを避けることができる、といった考えのもとに、大学の段階から家族と家族支援をいれていくことになったという経緯がある。

日本の学生に「家族」をどのように伝え、学ばせるのか、それなりの工夫が必要であろう。ライアソンのカリキュラムの内容から、日本で使える、あるいは必要と思われる項目を以下にいくつか取り出してみたい。

##### (1) 家族および家族が抱える課題について理解すること

###### ①家族というものへの理解

まず支援の対象である家族の現状、そして家族が抱える課題を理解することが求められるだろう。日本の家族も多様化し、多様な課題を抱えている。その状況に目を向ける、考える機会を持つことが望まれる。子どもを育てている親や家族が置かれている状況、それは地域によりそして家族ごとに違っている。それぞれの家族の状況とニーズについて、教科書に書いてあることではなく、身近な実際の事例を通して学んでおくことが必要だろう。そしてそれが社会という文脈の中にある家族の実態として捉え、必要であれば事態を改善していく手立てを考えていく姿勢が必要だろう。

保育者養成の実習の過程でも、実習生には保護者や家族との接点はほとんどなく、子どもを保育すること、保育技術を学ぶことが中心である。とくに子育て期の家族とその課題についてのしっかりとした学習は保育者としても必要であり、保育実習の中でもこれからこうした機会を持つことが必要ではないかと考える。

###### ②他の家族への自己関与

しかし子どもたちの背景にある家族の在りようは、学生にとっては自分には関係のない存在と映りやすい。もしその家